

隨泉寺寺報

平成26年(2014年)2月号 第522号

TEL 082-892-0217 http://www.zuisenji.com

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

仏婦講座

講師 覚法寺前住職 花田哲朗師

講題 『大丈夫の意味』

■ 信仰は悩みの逃避ではない 悩みの中に 救いにみちびく

九條 武子(くじょう たけこ)

2月7日は、仏教婦人会活動に力を尽くされた、九條武夫人の「如月忌」です。

明治20(1887)年、第21代明如上人の二女として誕生された武子夫人は、18歳から宗門の婦人会の結成に取り組むだけでなく、関東大震災の被災者救援活動や、女子教育、また病院の創設など、お法り(おみのり)にささえられ、多くの業績を残されました。夫人の遺徳を、偲ぶのみでなく、どう後生に伝えつつ、活動すべきなのか、自らを問う大切な講座です。武子夫人は、「信仰を特異の存在であるかのように思っている人たちは、信仰の門にさえ佇(たたず)めば、容易に悩みの絆は断ち切れて、みずからの欲するままに、慰安の光がかがやくかのごとく思う。しかしながら、信仰は一つの奇跡ではない 信仰は悩みの逃避ではない 悩みの中に 救いにみちびく」といわれ、信仰を麻薬のように、悩みや苦しみをまぎらすものと思っている人に、あるいは、奇跡のように、悩みや苦しみを消してしまうものと思っている人に、そうではないとおっしゃっているのです。

2月の法座予定

- 2月 2日 本部役員会
- 2月 7日 ダーナの日
- 2月 9日 掃除 平原上第2
- 2月15日朝席午前10時より 仏婦会員追悼法要 おとぎ
- 2月15日昼席午後1時より 仏婦講座
- 2月21日 瀬野川仏婦連合会理事会(隨泉寺)
- 3月 1日午後6時より 門信徒会本部役員会

☆第54回仏婦講座

2月15日に第54回仏婦講座を開催します。今年は都合により1日だけの講座です。朝席は例年のごとく物故会員の追悼法要を勤めます。今年は7名の会員の方がお浄土に還られました。7名の方はいずれも長生きでした。戦前、戦中、戦後を じて激動の時代を生き抜いて、ものの豊かな、平和な時代を築いてくださいました。生前を偲びながら大切に勤めさせていただきましょう。

大木	ハル子	97才	平成25年7月18日	出宮
長岡	トラヨ	99才	平成25年7月23日	平原上第1
上平	トシコ	83才	平成25年9月26日	井原
上田	島野	104才	平成25年10月20日	平原上第2
早稲田	ハルヨ	97才	平成25年12月5日	望ヶ丘
松本	由江	89才	平成26年1月17日	中須賀
小西	キクエ	84才	平成26年1月18日	長者原西

☆節分。立春



日本のくおに>は、人の目には見えないで、種々の災禍をもたらす、猛々しく恐ろしい存在一 をくおに>と呼び、それに中国や仏教で言う「鬼」を当てたようです。「鬼の目にも涙」ということわざがあります。それはどんな極悪非道な者にも一分の情けはあるという意味です。「鬼の目にも涙」があるなら、ましてや、仏にはとありますが、『浄土真宗聖典』のどこを探しても、仏の側に「涙」とか「泣く」という言葉は見出せません。仏は(人の)涙を超えた存在なのでしょう。だからこそ、(人の)涙を受けとめることができるのです。

そのはたらきを“摂取不捨”と言うのです。

【十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし

摂取してすてざれば 阿弥陀となづけ たてまつる】(「浄土和讃」弥陀経讃)

人生に涙はつきものです。泣きたいときにはおもいきり泣けばよいのです。それを受けとめてくれるものも、この世にはあるのです。

「泣きながら 御戸をひらけば 御仏は ただうち笑みて われをみそなはす」

「御仏の 御厨子のうちぞ 人知ら わが悲しさの 捨てどころなる」

「憂きことを 思ひいでつつ 泣く人は わすれ草咲く わが庵を訪(ともら)へ」

九条武子

浄土真宗本願寺派門主 大谷光真著 「あけぼのすぎ」

-- 浄土真宗一口法話 --2 月

「人間が人間らしく生きるそれが信心ということです」
(松本梶丸)

現代日本で、宗教と言うと、何か、特殊なことと考えられ、身構えたり、避けたりする方が多いように感じられます。マスコミの報道は、異様なものを取り上げますから、やむを得ないかもしれません。私達にとって、大切なことは、もう少し、自然なかたちで、人間として、自分自身を顧みることではないでしょうか。

親鸞聖人のみ教えに照らして明らかになるのは、何時も自分中心の考えから出られない私、大事なことを忘れて、目先のことにあくせくしている私です。

しかし、この私のいのち全体を照らし、支えて下さる阿弥陀如来さまの、温かいまなざしを感じることができれば、この人生はより開かれたもの、豊かなものとなります。それは、自他のいのちを何かの手段として利用するのではなく、いのちそのものとして受け容れることです。南無阿弥陀仏とお念仏申しつつ、共に手を取って歩ませていただきます。

自分は自分の主人公

光いっぱい自分にしていける責任者

東井 義雄師 2月

自分は自分の主人公

世界でただ一人の自分を

光いっぱい自分にしていける責任者

少々つらいことがあったからといって

ヤケなんかおこすまい

ヤケをおこして

自分を自分でダメにするなんて

こんなバカげたことってないからな

つらくたってがんばろう

つらさをのりこえる

強い自分を 創っていこう

自分は自分を創る 責任者なんだからな。



逢える日に

前座秀美

『【行ってらっしゃい】【お帰り】とってくれた、優しいおじちゃんが亡くなるなんて、信じられません。天国で見守ってください』 葬儀を終えて家に着いたら、ポストにこんな手紙が入っていました。

主人とは本当に思いもかけない急な れとなり、悪夢を見ているようでした。些細なことで、口喧嘩もよくしましたが、常に一緒に行動をしてきたように思います。いつもそばで見守っていてくれたように思います。この命の儚さ、この悲しみは何なのでしょう？

いのちある者は必ず れがあるといわれます。わかっているつもりですが、このあふれる思い、流れる涙は止めようがありません。

若くして父をなくし、苦勞をしてきた主人は、本当に家族を大切にし、子供たちを大事にしてくれました。アルバムにはその当時の思い出が、ぎっしり詰まっています。

お父さん、今まで いっぱい いっぱい ありがとうね。

たくさんの方から主人への感謝の言葉と、私への励ましの言葉のお手紙をいただきました。私の存じ上げない方から、いただいた中には、退職して長くなるにも関わらず、在りし日の主人のことが書かれてあり、本当にうれしく思いました。なくなってからも、改めて人との関わり方の大切さを、教えてもらった気がします。

この寂しさは、なかなか埋めることは出来ません。がもし、お浄土で逢えられるのならば、その時主人と色々と話が出来るように、今生かされている日々感謝しながら、前を向いて歩いていかねばと思っています。

毎日を大切に、時を重ねて生きたいです。 逢える日を楽しみに。 合掌

法名 釋久遠 俗名 前座 久生 25年11月21日往生 行年66歳

花のたましい

金子みすず

散ったお花のたましいは

み佛さまの花ぞのに、

ひとつ残らずうまれるの。

だって、お花はやさしくて、
おてんとさまが呼ぶときに、
ぱっとひらいて、ほほえんで、
蝶々にあまい蜜をやり、
人にや匂いをみなくれて、

風がおいでとよぶときに、
やはりすなおについてゆき、
なきがらさえも、
ままごとの御飯になってくれるから。

